

寛永諸家譜

清和源氏
支流
癸七冊之内

58

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186 (56)		
函號	特	76	1



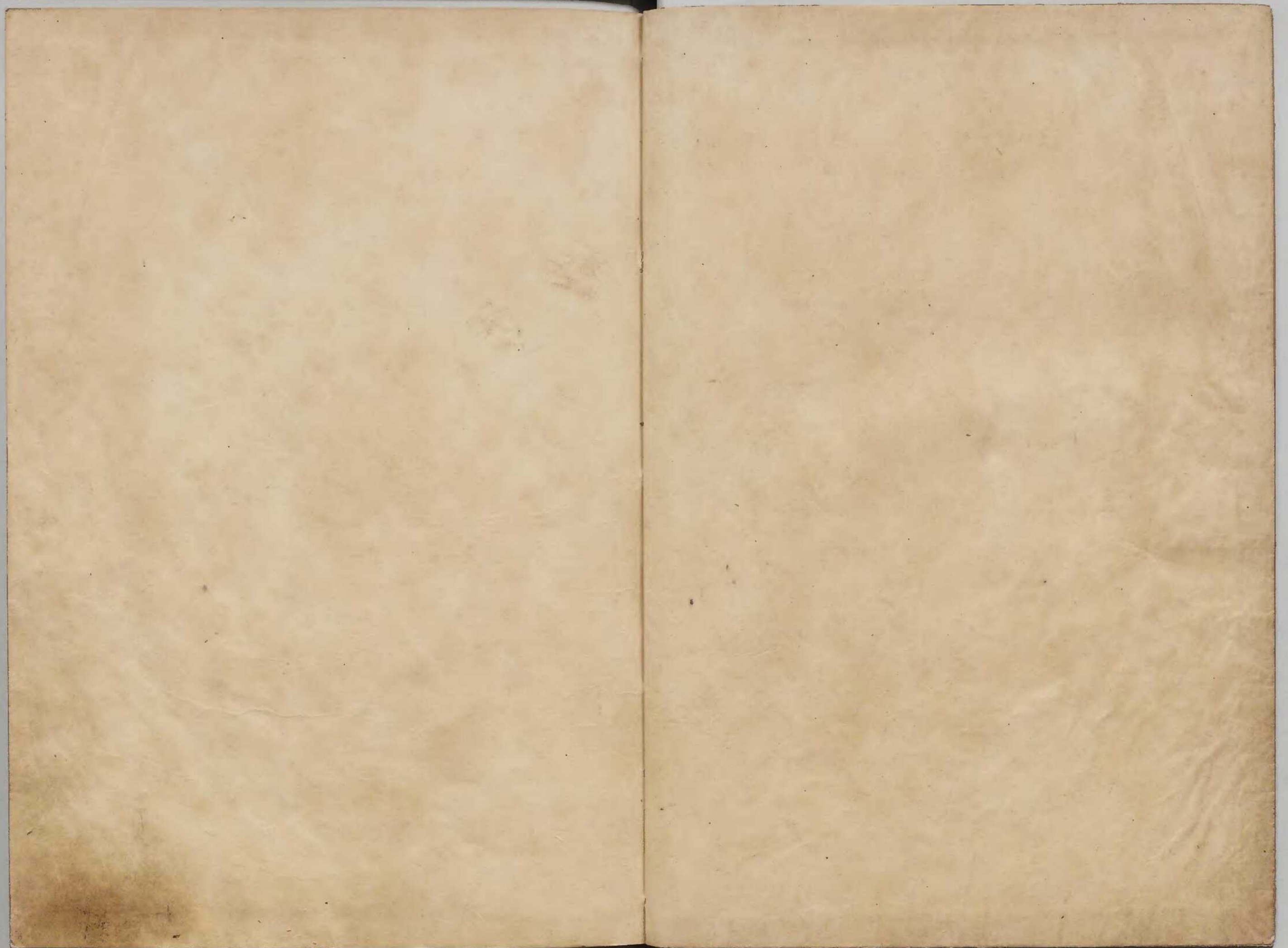
Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak





蜂次賀

金森

寛永緒系圖傳

清和源氏

卷一

支流

蜂須賀

河波守至鎮大坂の軍切よりありても
く松平の格号となす

淺草文庫

三利

童名ハ 小六 秀人

尾列海東郡蜂谷の里と領と

三勝

三利の婿男 童名ハ小六 老六清門村

注目下 修理下

大永六年尾列蜂谷の里の里の里の

播列珍のの味の味の

三勝の尾列の大山の味の織田の高尾の村

信清の旗の下の属の信清の他の属の

時のれのよのうのひのくの清の御のりの大山の

味のとのせのあのさんのとのうの入の信清の御の陣の

食の後のとのかの所のはの三勝のとのりのとのとのとの

大山のの味のとのりの又のとのうのの時の有の級の清のあ

尾列の岩の余のの味のとの織の田の岩の清の村の旗の下のかのとの

りの時のあの老のとのとのとの清の村のたのりのとのとのとの

りの岩の余のの味のとのりの又のとのうのの時の有の級の清のあ

りのとのとのとのとのとのとのとのとのとのとのとの

りのとのとのとのとのとのとのとのとのとのとの

小神と云く

辰浪回母者山塚守道と云く是の時

道三其子義新と石和より合戦

下しひ物脱あ方の乃くひは正勝道三

方より首級二つと湯と云

永祿三年尾刈捕授るは織田信長

今川義元と合戦の時正勝信長より

一言名一首一つらり又一人と

いけをれ

同七年辰浪回猶兼山より母者石塚村

新奥と信長と合戦の時正勝信長の旗

下より首一つらり云

元龜元年信長越前国小浜山の塚と

せしは時信長より一つらり云

四年四月越前国金崎の陣信長の旗

入し時これより先攻陣あり云

法承より志めし云けり云は新者す云

出くされり云果と云の云

是く心愈しく油陣のるべしと申す
信長之儀は同しなほ正勝のひま村
常陸の生約甚く
後、他馬守と
加右衛門
右へ入るとの
ふ又秀吉退陣の時正勝とありし
あり此後而も教度の戦場、秀吉を
くして旗下となれ

同六月は別播山合戦の時ありし

とれ

同二年尾刈長崎合戦の時秀吉の旗不
し属して首級一つと得たりし時正勝が
弟三えうら死すと

天正元年秀吉は別長濱へ入部するとき
正勝本村の外へも渡りあわくか
たまわれ

同三年揚別大坂橋本合戦の時味方
故軍せし正勝うらひとみせしこれ

より信長より鷹取として湯紋の華
羽織同草袴とを御すはは時正勝家
中村治郎左衛門首一つらうはは全我
首敷とあり一人の首名とあり考を
威州とつけか増としてちり百六
まうはすから威州められとのとき
信長より鷹取として湯紋の草ひ
とたし

田七年揚列と本の味と別而小三郎

と退治として信長より信忠と考者と
うしこられ信長の附味とと色とれ者
大膳とせめく具附城とあり考者の旗
中一とせきとれ而は正勝足輕と別氏
略とつとといと別而二族あはれ
のうしこい二百餘とありして揚列と湯
正勝在東の別氏清陣を考は本
ふ時とつといんありと教火するやと
くしこい大とけと考は考とれ

所^い其^い巧^い長^い正勝^いけつ^いも^い火^いと^い多^い一^い也^い
將軍源義昭^い津^い廢^い多^いして^い相^い也^い紋^い乃^い
涉^い好^い織^いと^いな^いま^いり^い津^い紋^いと^いり^いさ^いり^いと^い也^い
し^い相^いの^い紋^いと^いま^いら^いゆ^いこ^いも^い秀^い吉^いの^い紋^い
相^いな^いれ^いゆ^い相^い乃^い丸^いあ^いら^いじ^い
三^い勝^い々^い本^い領^い尾^い羽^い海^い東^い群^い蜂^い須^い賀^い乃^い里^い
か^いり^い信^い長^い乃^い海^い東^い群^いの^い目^い三^い割^い乃^い御^い
ま^いあ^いわ^いく^い加^い増^いと^いな^いま^いり^い
日^い九^い年^い秀^い吉^い播^い磨^い八^い田^いの^い別^い正^い勝^い新^い登^い

と^いな^いま^いり^いれ

日^い十^い一^い年^い秀^い吉^い乃^い丹^い波^い河^い内^いの^い目^い乃^いく^い
か^いり^い六^い千^い石^いの^い加^い増^い乃^いり^いて^い久^い後^い正^い勝^い乃^い
糧^い料^いし^いと^いと

日^い十^い四^い年^い平^いと^い六^い十^い一^い案^い

原^い岩^い津^い塚^い海^い縣^い寺^いと^い号^いに

正^いえ

七^い四^い

女子

聖徳太子在唐門の妻

家政

正勝の嫡男 童名小六

永祿元年尾刈蟠浦聖の里より

三勝の秀吉の膝下より

信長又子より

天正二年信長武田勝頼より

て今我の時秀吉旗りあり

一ツくらと

同六年橋刈廣瀬の味方宇野一門と

川つばね城と立退き

まゝにおいしげ急ぐ我々宇野二族重信

とららぬはさきと秀吉感した

まじく慶みしてつき毛の

なきくたまりに其外あるの軍

刃の逆をうけく慶みわり

同七年御外相衣石の塚は秀吉より南條
勘兵衛より一をうけ兩下安藤の毛利
家より相衣石の塚よりありまじき
塚中塚より長根つきく勘兵衛孫塚より
之がこさう一はさうえいけはあ政考を
し相衣石の塚（長根よりあん）をら
りぬ秀吉孫塚ありたりてせよこれと
しやうすしとしとく脈をわら又其
時よりか相衣石の塚とんすてらるる

相衣石の塚は西岡のひささかりの
せき政とけりありては北條よりあん
とけりありはひささかりのひささかり
しにけりありありありありありあり
とりの人数よりわくえひとあり御外
の塚より種子屋門前本平太史と
つ塚よりつけられあ政よりありあり
法信の家にあり長根とつけられなく
相衣石の塚よりいれられありありあり

とむくすしとてつりし秀吉これと感懐
もて尾張甚右衛門尉後また尾張尉とて腰抱
とてつり

同十年松川勝新寺よりあつゝの智目留

一我の時に政港とありしす

同十一年に列志津嶽よりあつゝ全我の

時首つりしす

同十二の秀吉より紀列一獲のおさへに

して泉列岩和田の津よ中村式部が捕

とつゝつりしす

よつゝつりしす

同二月二十一日一獲せ給はるる度の全我は

政港とありしす

外は其のれありしす

橋列依り郡の月田月利干ありしす

地とありしす

同十三の秀吉より河波園たまりしす
那津湾の津よつりしす

日十四日三月二日 汲み傳下ノ叙一ノ波也
一ノ波也

日年日向同言 汲み傳下ノ叙一ノ波也
と云ふも秀吉法軍勢と云ふしむらぬ
い所を政より見んと城をこつては城
中より歎無しと云ふ政見しむらぬ
一我と云ふも未のこれのもいふ名一
詔と傳中一川と云ふしむらぬ
そ外討死するものこれなり

文福えの朝鮮征伐あつて

教と云ふしむらぬ

と云ふしむらぬ

と云ふしむらぬ

と云ふしむらぬ

と云ふしむらぬ

と云ふしむらぬ

と云ふしむらぬ

同三の二の朝鮮一ノ教と云ふしむらぬ

河東政はこゝの家をむらうしこすべの
秀吉の下知より海海とあむと
之唐島と書のおく朝鮮人書取との
ひききありしとあむともお合歌と道
しきい書取一艘のりこれ
天長二年とこい朝鮮一軍兵とこい
せうくけ家政と海海一昌原と陣
しとあらる所は浅野た系史
後日記傳事と
を陸蔚山とせりしとく漢南と書取

指掌録(徳川幕府)
巻之三
目録

軍とともありし如敷主計頭
まこもく法持の持りしとてい人
くしや蔚山とていしとてい漢南の
大軍蔚山とていしとてい
めいことしとてい法持とていしとてい
まもことしとてい歌六とていしとてい
漢南蔚山とていしとてい
同天年別録とていしとてい
一十九年江戸法持とていしとてい

河東政はこゝの家むらうこすべの
秀吉の下知りあり濱海を治むと
之を治むるのふし朝鮮人番船の
りけきありしと家むらもか合款と進
しきい番船一艘のりこれ
天長二年とこひ朝鮮軍兵とこ
きうけ家政を治海一昌原と陣
と志ろふあり濱野た京史
を陸蔚山とせりしとこ濱南と勢大

軍とともなるより如板主計頭
まこつとも法持の持ありしとこ
蔚山とこりしとこは急は漢南の
大軍蔚山とこりしとこは急は漢南の
ありしとこは法持とこりしとこは
まこつともなり款ありしとこは急は漢南の
漢南とこりしとこは急は漢南の
同天年利發とこりしとこは急は漢南の
同十九年江戸法善寺とこりしとこは急は漢南の

いしやみほを志うれあめ大坂沙も切めわ
いしやみほを志うれあめ大坂沙も切めわ
一糸勤とまきのうつけきされゆか
依渡さるまで先使と下一はまや
うめ同しきく大坂の舟と海と夜
十月十日三列を回み足船りすきま
常照大権現沙が馬ありく忠務よあて
沖美程のうけなまはめはわく
沙目たれあ 沖法と志うれあめわ

あま忠務より中島と野女 上意のうめ
つげくいけな大坂の舟と海と夜
事別う忠とま 黒石が志うれ沖目ん
あま忠と地と志うれ沖目ん
台徳院殿沙目んはすのうめ
と別者川と志うれ沖目ん
あま忠と志うれ沖目ん
台徳院殿あめ湯一はけあれ 上意
てあま忠と志うれ沖目ん

右徳院存所回書と有度くうたまりぬ
そ詞ふいふ

今方於此表の波も系す精入候
と満足に依くも回書作あ由拜
大始働りや

十一月廿五日沖黒下

孝店

昨十日の長於大坂他波口歌為歌
然能者か河波も書取つ下堅付

おとよははし時出右波く若丸付
描すは郵働実心感思存あ由なる
依渡ちるや

十二月十七日沖黒下

孝店

え和えのふはりのいりよりのあ

右徳院存所の形は蓮店 沖初可

出されか下けかきさ 上意して法眼く

だふれ共うは長服あびぬ銀子三十あ

汗^{あせ}の^うく^く海^{うみ}ま^まと
日^ひの^あ夏^{なつ}大^{おほ}坂^{さか}陣^{ぢん}の^ま遠^{とほ}居^ゐ

大権現

名^な正^{せい}院^{いん}殿^{でん}一^{いつ}沖^{おほ}目^め見^みの^たぬ^ぬ岡^{おか}と^おお^おの^のま^ま
天^{あま}の^のく^く海^{うみ}よ^よ日^ひ敷^{しき}と^と送^{おく}り^り
や^やく^く大^{おほ}月^{つき}入^い日^ひよ^よ糸^{いと}巻^まく^く沖^{おほ}馬^まの^のみ^みぎ
の^の沖^{おほ}目^め見^みあ^あく^くぬ^ぬく^く
引^ひら^らげ^げた^たま^まつ^つく^くあ^あの^の沖^{おほ}陣^{ぢん}の^のま^ま
長^{なが}坂^{さか}三^{さん}所^{しょ}の^の陣^{ぢん}と^との^のま^まと^と沖^{おほ}陣^{ぢん}の^のま^ま

引^ひら^らげ^げた^たま^まつ^つく^くあ^あの^の沖^{おほ}陣^{ぢん}の^のま^ま

大権現

名^な正^{せい}院^{いん}殿^{でん}の^の沖^{おほ}目^め見^みの^のま^ま
り^りの^の黄^{わう}金^{こん}入^い百^{ひゃく}の^のま^まと^と沖^{おほ}陣^{ぢん}の^のま^ま
の^の大^{おほ}坂^{さか}陣^{ぢん}の^のま^まと^と沖^{おほ}陣^{ぢん}の^のま^ま
の^の情^{じやう}色^{しき}あ^あく^く長^{なが}巻^ま我^{われ}の^のま^まと^と沖^{おほ}陣^{ぢん}の^のま^ま
の^のあ^あく^く中^{ちゆう}内^{ない}の^のま^まと^と沖^{おほ}陣^{ぢん}の^のま^ま
の^のあ^あく^く大^{おほ}坂^{さか}陣^{ぢん}の^のま^まと^と沖^{おほ}陣^{ぢん}の^のま^ま

女子

わくの中を佐渡とくく 上関のまき
 けさだ 沖威のあまの沙塵殿として
 黄金百両ある飲と中内也右衛門中津
 ことりやとこれあつわく関石とけい
 遊庵玉法又りよとごうれ
 寛永十六年十二月晦日病歿年二十一歳
 遊庵常仙瑞雲院と号す
 黒田流前也長政室

女子

至鎮

お田右衛門妻

家政が婿男 童名い子松丸

天正十四年河波國津清の味も生か
 文保二の八歳の時秀吉の命もいりて

長門守と号す
 長久年遊庵が子替とす

同年

大権現と松系経清是治のため上りあはれ
向ありく下野国小山 清系経の経法
信身と志よりやま 石田法部が物之成達
心よりあはれ

大権現小山あり江戸一河馬と入らばすか
ち濃列開東へ河野向の別と法これ
志るがひはくまの河野年十六

同九年

大権現の約命より法下叙の法
り

日十九の大権現の別と法行列つま
を陣と十一月十八日本陣おの足場
と見しうらんがためと法を指田能理亮
中村右をよめ一建又川筋一毒高奈
と舟よりけり一法川ととてはと
うも一りの茶麿山一り

大権現

玉座りもろい今使者とてしつて
おしく至鎮一ふめく様も治とのり
のうつふさめあけい道ハ返る旨と
とすきくわく へ使に人ハ返る
かつれそ日の先もあえ山田織部依梅は
日秀助おがわけひきられ神さびい森甚
か船よれささきつふた 二國よまを
後至結様も治とてしつてあつて
後こ上使とてしつてあつて

の日に在陣一柵とてしつてあつて
あつていれあつてあつてあつて
くつけなつてあつてあつてあつて
客とのりこれあつてあつてあつて
十一月二十九日あつてあつてあつて
同長吏を介船とてしつてあつて
右を先とてしつてあつてあつてあつて
地船よとてしつてあつてあつてあつて
い州長吏とてしつてあつてあつてあつて

同夜多晴幾しあをせ首つたうらとれ
幸哉多晴いあをせ首つたうらとれ
死と森長左衛門廣田加右衛門首つた
うらとけ外祇とつゆらあ
同日の英仙波乃河と大坂より自廣と
晦日の未ぬく一河とせんけい教敗
わとれくより小旗とといわくても
かりとれとあつた後 上野より
石の津堂と陣と津堂より河

蒲橋つめまぐは家とつり竹末とつら
の急は信家のいまとうつひく教方あ
銃炮ときびくうらつたあいにあみ
あつたものこれあり

十二月十六日の英世の下別は三鎮陣屋
大野直馬がよりあつたあつた
お合款あつたうらとれ味方と中村
右とつたあつたあつたあつたあつた
稲田修理亮とあつたあつたあつたあつた

指田九郎と清高と岩田七郎と
とすはれと上岡と進とけお家の思
を若川小右衛門とあせぬとゆ
言ふと清橋井十と清鶴洞七郎と清門
いづれも首級と得たりと飲或飲
ちとゆ衣とゆゆ成り成りたすぬの
これありともかきと上岡と進と
大坂清和隆のみきり茶麩山一御目見
ぬ徳信のちよぬ

大権現沖花一りこれ出なるは清高と
清威ぬおゆ一りゆらゆらとけあ
と意しとるお半もやぬくひがゆ
の時と思はるる

大権現のあやうりゆらゆらの清高と
清上帯ととるせれお下とゆのし
ゆゆとるお鎮も謝して清高と
とゆ又上使のゆらゆら清高と
呉服一重黄金と百あおぬぬとゆ

八載わいのちしつゝ一いとふりしつ上あ帯おめめのいぢぢ人
河波わな國くに（こ）こくくくく一い太たののつつ肩かた衣い袴はかまとと子こ和
ももめめてて袴はかま美みと

大権現おほいけんげん茶ち麩ぼ山やまが 涉せつ産さんの時とき十二月じふにがつ廿にじふ日にち法ほつ

しつゝていいなな軍ぐん志しととははくくとと事こと 沖おき威ゑの

旨しよ涉せつ産さんししくくああたたもも 沖おき目め見みおおりりせ

つけららぬぬ指さし田でん家け心しん林りん道どう威ゑ つかつかええれれわ

ししののここささ 上う意いととくく 黄わう令れい百ひやくああたたぬぬと

つきつきめめ指さし田でん順じゆん理り亮りやう つかつかええれれ沖おき威ゑ威ゑ威ゑ威ゑ威ゑ威ゑ

戴たいああびびめめええ重じゆうのの涉せつ腰わうおお洋やう領りやうととはは指さし田でん

九く節せつ美み情じやう つかつかええれれ沖おき威ゑ威ゑ威ゑ威ゑ威ゑ威ゑ

通つう光かうのの涉せつ腰わうおお洋やう領りやうととはは指さし田でん城じやう部ぶ依い指さし田でん口くち

内ない参さん助すけとと つかつかええれれ沖おき威ゑ威ゑ威ゑ威ゑ威ゑ威ゑ

太たい入いり三さん清せい岩い田でん七しち左さ清せいつつとと つかつかええれれ沖おき威ゑ威ゑ威ゑ威ゑ威ゑ威ゑ

ああひひもも兵へい胆たん以い戴たい森しん基きをを更さら 沖おき威ゑ威ゑ威ゑ威ゑ威ゑ威ゑ

いいもも兵へい胆たん以い戴たいとと太たいのの介け 上う同どうとと進しんせせととらら

ままののままままままのの将しやう軍ぐんあありり至し鎮ちん目め分ぶんのの沈しん

又またあありりししいいととくく也やかか場ばうととつつととん

大徳院殿 畠山 涉越のありて五月十一日
至徳と畠山へつてと夜の軍忠御威

おげーまらー旨言をありつて

上意ーく松平の姓とくこれ涉威の

らびも順考した文字の涉勝れと以裁と
涉威書の詞

今度お撰列大坂表様も涉并仙波
西錫粉骨勳軍大く兼法頼徳威
是作因茲賜松平氏考や

崇長二十年

五月十一日 涉越判

松平 河波 考

其上考考ども 涉目見おせつ

稲田宗心林道威 石おこれ

上意ーく黄金百両宛あるとみ稲田

修理元 百おこれ 涉威状

涉腰物 ね領と涉も稲田九郎

涉威状のびよ 近考の涉腰物

山田城跡依極口月形助 石かれ浪威状以
戴治よ孝まふ清岩田七た諸門 石かれ
沖威状あしひも呉服を領森甚を交浪威
怖あしひも呉服弾銃と
えわえ年大坂五礼の時至鎮卯月二十日
船めく教向さるる海と日よりあ
つて阿波國の川口船より日
とあしひも呉服と本田と野分と
上岡よま——しひも呉服と本田と野分と

トすれ日二十七日浪瀧の浪瀧あしひも
くう回二十九日泉列田川よ美船と志れ
おしひも呉服と本田と野分と
難夫とひくは浪海と本田と野分と
おしひも呉服と本田と野分と
おしひも呉服と本田と野分と
おしひも呉服と本田と野分と
おしひも呉服と本田と野分と
おしひも呉服と本田と野分と
おしひも呉服と本田と野分と

いよいよは地一揆の聲をききあがりけり
たぬ紀列へ人をつりて其意を尋ね
田川あづむらひとて一揆の首領と
きこて町ら百姓もいと人志らまじり
宮内少輔あまね平右衛門あむらひは
ゆらぬの味へつりていふ言をまじり
もつて上岡よまをせしめしり
んとせしりも紀列の一揆もあつしり
但馬守せしめしりいふ言をまじり

まぐとてしりてなぬ七日のひかすは地
まぐとてしりてなぬ七日のひかすは地
いふ言をまじりてなぬ七日のひかすは地
いふ言をまじりてなぬ七日のひかすは地
いふ言をまじりてなぬ七日のひかすは地

台座院殿あむらひの傳の後
右徳院殿伏見あむらひの時を
後海國とてしりてなぬ七日のひかすは地

〓 沖胸下され歸國
元和六年二月二十六日病死二十八歳
心慈義傳後述院と号し

女子

池田出羽守申とく妻

正慶

美太堵門村

台述院殿よつ久とる

女子

井住掃部頭直春室

女子

松平加賀守妻

女子

松平官内少輔忠雄室相換守光仲母

忠英

至鎮か婿男 童名ハ子松丸

母小笠原長宗の御孫 寛政十二年
長十六年河内徳島の城主に
元和二年忠英六歳に
系勳と

同六年十歳に
同九年九月十日

台陸院殿の命より

恒位下に叙し河内
恒位に

恒位に 河内恒位の字より下され

寛永三年八月十九日 釣命より河内恒位

恒位

同十一年八月八日

將軍家法純目の法判と功載と

同十三年 河内恒位の字より河内恒位の

石垣より河内恒位の字より

女子

水野出雲守成貞の妻

某

某

千松丸

下総

家紋

卍字

先祖柏の丸

至鎮

しんまんとよあたい

大権現

しんまんとよあたいの御威

於大坂仙波表繪次賀河波守と縁取
切取の合縁別進筋款刻意取
し糸を以て敷は合縁骨し玉沖威
思ふや

十二月廿四日御書判

指田修理亮より

今度於大坂仙波表繪次賀河波守

今度お大坂仙波表蜂波美河原の
給来切おし家合強引追前給来
粉骨し玉沖感おのりや

十二月廿四日同

岩田七郎右衛門

今度お大坂仙波表蜂波美河原の
討捕廻し系粉骨し玉沖感おのりや

十二月廿四日同

森五右衛門

仙波表の沖感

今度お大坂仙波表蜂波美河原の
陣取入取討別合強引追前給来
被取し系之比強働感思おのりや

長二十

三月十一日沖書判

岩田修理右衛門

と為お孫別大坂仙波表松平の波留
陣取入新討別と為高名系粉
骨と至感思也

長二子孫

正月十一日同

猪田丸と至感思也

今度お孫別大坂表様多治郎無念
我場錫粉骨と條松平の波留と至感思也

と至感思也

長二十

正月十一日同

山田織平作也

と為お孫別大坂表様多治郎無念
我場錫粉骨と條松平の波留と至感思也

長二十

三月十一日同

梅口内発助のへ

と度お振列大坂表様多治五博前例
防我の別錫粉骨の糸相平の波
と波達して感思を

長二十

三月十一日同

森甚の

と度お振列大坂仙波表書平の
陣取入の別合強前
錫粉骨の感思を

長二十

三月十一日同

岩田七郎

と度お振列大坂博前例然合防我
別合強前例

之
粉骨し玉威馬
下

長二指

二月十一日同

森甚太史より

長行

五郎八

江口位下

後、利發して

金森

家傳といく先祖將軍源義持
みほしく源をうも源の姓氏
たまたま土つとて色系圖終末して
併なす

素直忠孝は 兵部卿は平に叙せ

らぬ 生田美流

幼少の時より織田信長よはしきく

長の子とにもなり相の幕に致し

され壯年より相とびて使者となり

撰武者二十人の内より選ばれ

我切あり

天正三年

東照大権現武田勝頼と冬に別長藤を

合戦の時信長が弱しき 後白
長直も是より志すべし信長の下知り

大権現乃部将酒井は信の尉忠次也

おろく萬葉の城とせしむるは切

あり信長を感して勝れとて

はく

同年信長が筑前と征伐の時

長直も其後より後白にて越前大

野郡よ入々城をさあおぼして賊徒
わまこと討ちつり軍功あり信長大
野郡よ長逝しつる

同六年荒本掾はち村を居城と
らつて信長よりしり同年十一月
信長大掾とほつり掾別居あり
附城しつる長逝なむび不破河内
守前田入は荒本村を信長の命を
うけつる是しつる信長は陣と懸持

奇小つりして翌年みづろまで志をく
軍志しつるげます信長られと賞
て教る恩賜あり

同七年十二月信長荒本が一族と謀
く長逝不破前田等とほつりま
らちむ

同十年信長武田勝頼と征伐の時
飛弾口の大将として騎兵より卒三
千を討ちつる教へ

同年六月明智日守光秀系幼中
能く少く信長と戦すは時長進を
をうへん事とけうく豊臣秀吉の
旗下小属す光秀はわぬ減亡と
同年の冬秀吉柴田修理亮勝家
と不和となりしと長進和睦と
しるのみ

同十一年秀吉勝家素直と
をね事と事しと河内かく大合

戦よおよぶ時長進あまびよか
重秀吉れ幕下にあり

同十二年秀吉織田信雄と尾刈少く
射陣の時長進河内徳山のねあり

同十四年飛騨一回と修と

同十六年秀吉九列信津氏と征伐
の時長進下重られよとてふ

同十八年秀吉相列小田原陣
後向乃時長進下重られよとてふ

軍切とてしげすあ人田崎勝左根凡
元三郎を敵新母大塚左吉岩田江
大野宗左為今井利左名門石戸城
赤右衛門藤保忠高左為多首級と
に

日十九年奥州九部一揆蜂起の時

長道下重少とも秀治よ志と

が陣と

文禄元子の秀吉大軍とて

物部四と征伐の時長道下重秀吉よ
志と少く肥前名護屋の陣よあり
秀長也年石田治部少輔三成派叛め
し

大権現共とありと法別関係一各
の時長道信少して涉旗かあり
下重は同四部と八幡の味とせあり
おのいふ沖田陣の後ひ貴よ依
濃列上有知とびり園又行が

金田少く二万石の沙加増とたまりて
死弾一四本のこゝろに
回七年城川御見あはれ

大権現長近が館は 酒造ありて終日
宴しとまりたまふ道より毎
年一月より一ある 台駕をよせ

らまゝく沙然さますくあはれ
日八の

大権現山城持津江田和泉は今四の

田あゝく齋場と長近よりたまふ翌年

長近

大権現の沖布は旧作せし時齋持光

齋と故よりやいさやこせしたまふ

名道後と齋の沖ゆりてとけり

ぶか火死事とぬすけり齋持光

うね雨ありと中よけし

大権現これなきことせし家より

思許ありて齋の奈齋一聯黄齋

二聯とたまふはばくくく雨の
露と秋と

日十二年八月十二日卒す歳八十四
金輪院と号す

下重

か雲守 江中位下

實の伊能氏なり長逝とてお老のみ
おふまゝくみなりさゆへ下重をい

つごごす

初任長みけくく後秀吉よつふ
天三年中教度の合戦も長逝也

あゝく軍事とほとむ

文禄年中朝鮮陣の時秀吉の仇

なとして肥前の名護屋のおとし

け地少く名物の丸壺れ茶入とたふ

秀長三年秀吉薨すられし重

さきお移くきおしして延秀の

勝おとしたる

日也年

大権現石田三成と征伐の時下重松系
古依守のころ下の徳川頼朝と八幡の
城に發向してあすんでこれと
せめてく大ぬ敵兵と討ちあつた重松
士卒の勝者同太道同虎門平井
孫軍師棚橋勝久伊藤権左衛門
久次渡邊小平を敵派はたす門馬

有級とゆらり古依守防我す事
あつて降参すことくぬ落城
の時下重松兵我死するもの又六十
餘人

大権現を感すたすひく米地二
百石の所か増と長進ぬたす

同十二年長進卒す

大権現の修め依く長進の忠告と
つぐ苑弾一回と銀ど二万石地と

才也郎公よりちほりし時

大権現より沖野馬を下重なる

又

台徳院殿より四波の沙腰おなびり

沙野馬と并領す

日十六年

大権現より考別下妻より沖野馬

ゆりされ

大権現

台徳院殿より鷹取沖野馬と並

同年十二月二十一日

台徳院殿下重館より渡沖の時回光

の沙腰指よりびも根子沙馬沖腰

とぬり

同十九年大板陣の時信長より列

天王寺より仕寄とけく

翌年五乱の時下重よりびも小和

羽馬守伊友掃部助 約命

ゆりて小お大おもる吾英が丹城泉列
岸和回のが城せなる於六月七日大坂
の城没落の時下重岸和回れ城少
かく沖旗本一統未ずら途中少く
敗北の兵八人と生少りも外二百八
の首を切く沖本陣一統と
元和元年閏六月三日卒す歳五十八
雲峯閑云と号す

長則

忠二郎 織田信忠一統と

天正十年六月二日信忠二條北城少く
自殺れ時長則も又三つ死す
志くふけぬ年十九 法名崇峯

某

其而八 長道老母れ実子

其長十二年父長道卒す

大指現長道が領地の同儀列上有記

重次

園中いふ河内列金田少く二万石
此地よりよりたもつ

同十六年十月六日六条少く病死
法名了悟

飛彈守

位下

判發

宗和と号は

父と不和よりなるく洛陽小庭飛

重次

甲斐守

位下

享長十二年

台徳院殿と評し

元和九年

將軍家沖入洛此後子思沖乃時重次

相列小田原少く病しつりてうは

病久し

寛永二年九月八日江戸少く死

大権現の侍奉とほむし重頼志了くも
仰りしとけふもいふ年凡列那古
屋よりあわく 均命あつて濃列
此内関吉回し三石石れ来地くはふ
元和元年大坂身礼代時も又侍奉
同年六月又下重率と付又遺物と
志く因沢此津腰切三宗此津脇志
笑れ茶壺と
大権現と秘と又志津此津脇也吉先此

沙脇指うびぬ府衛雲山の茶入を

台座院殿一秘と

大権現室料よ 命とて下重が家督と

たまりしとけふもいふ年凡列那古

長光の侍を刀一腰と秘と

台座院殿つとけあも 津系一

出らましくけ先きおわして秘と

の雲山の府衛と下と

同日年侍いと備とたまりしとけふも

台徳院殿と書し
大坂の陣の陣
寛永二年

寛永二年

お軍家よけり人

田三子三月九日初九 年二十五

月英宗心也号す

重勝

元系亮

重勝の同の同少く三千石の地と
重勝よけりあはふ
寛永十九年

大権現

台徳院殿と書し

大坂の陣の陣

寛永三年

お軍家よけり人

重義 しげよし

左兵衛尉 さへいゑう

元和八年

台徳院殿とくとね一ちまりて法書院書て

と法書院

寛永九年

將軍しんぐんあゆつくちまりて沖こし小こ姓せい継つぐの書

をつかしむ

賴直 らいちき

長門守 ながと

恒忠位下

寛永四年七月七日七歳しちさい少しく

台徳院殿

右軍家みぎぐん一ち湯ゆ一ち書かけ

同十一年十二月二十日恒忠位下

叙しよ一ち長門守ながとちまりて

重利

右通

寛永十三年六月八日七葉少

將軍家御用

同十九年正月之日

竹千代君を

家紋亀甲

